

新収蔵資料 | 北風荘右衛門家文書

11歳から「小もの」として勤め始めて、他の同じような立場の者たちと共同生活を始め、33歳で通勤と妻帯を許される「宿持」に。35歳まで滞りなく勤め上げたならば、垂簾(暖簾)・長持・夜具・式服(礼服)などを渡され、屋号「喜多屋」を称し、自分の店を構える「本別家」になる——現代の感覚からすれば、いささか長い道程かもしれませんが。

これは、兵庫の豪商として名を馳せた北風荘右衛門家の当主、貞和(1784-1857)が、安政2年(1855)に明文化した、家業に関わる規定です。今年度の新収蔵資料「北風荘右衛門家文書」のうち、「家法ケ条書」という文書に記されています。

「北風」という家名の由来は、延元元年／建武3年(1336)2月、貞村の代にまで遡るとされます。貞村は後醍醐天皇方につき、九州へ下る足利尊氏を兵庫で奇襲して、軍功に感じ入った新田義貞から「喜多風」の名を賜りました。しかし、5月の湊川の戦いで義貞は尊氏に敗れます。北風一族も戦死者を出し、敗走した貞村も、再起をはかる途上で没しました。苦境のさなか、貞村の妻・藤ノ尼が遺した文書が「尼ヶ文書」であり、これを子孫たちは遺訓として大切にしていました。原本は天正(1573～92)の頃に失われたとされますが、写しから概要を知ることができます(「旧記抄之写」)。

「人増ゆとも我が人となしそ、物増ゆとも我が物となしそ、おおんため(奉為／御為)の人、おおんための物ぞ」(人が増えても自分の人だと思ふな、物が増えても自分の物だと思ふ、公のための人、公のための物であるよ)。末尾にあるこの一節は、北風家において特に尊ばれてきました。「公」の意味は、時代によって変化しますが、なんと力強い響きでしょうか。この言葉に導かれるように、幕末期の当主、貞忠(正造、1834-95)は国事に奔走したのです。



「家法ケ条書」(部分) 安政2年(1855)正月

神戸市立博物館

〒650-0034 神戸市中央区京町24番地
TEL.078-391-0035 FAX.078-392-7054
<https://www.kobecitymuseum.jp/>

利用案内

開館時間:午前9時30分～午後5時30分

※金、土曜日は午後8時まで開館
(2F、3Fの展示室への入場は閉館の30分前まで)

休館日:毎週月曜日(ただし、月曜日が祝日または休日の場合は開館し、翌平日に休館)

※年末年始のほか、整備休館など臨時に休館及び開館することがあります。

詳細はホームページか、博物館までお問い合わせください。

高校生以下は観覧料無料です。



神戸市立博物館は、昭和10年(1935)に建築された旧横浜正金銀行 神戸支店を増改築し、昭和57年に開館しました。御影石の外装を施した古典主義様式の建物で、平成10年(1998)に国の登録有形文化財(建造物)になりました。



アクセス

- JR「三ノ宮」、阪急・阪神「神戸三宮」、ポートライナー「地下鉄(西神・山手線)」三宮から南西へ徒歩約10分
- 新幹線「新神戸」から神戸市営地下鉄(西神・山手線)で「三宮」下車
- 神戸空港からポートライナーで約18分、「三宮」下車
- JR、阪神「元町」から南東へ徒歩約10分
- 地下鉄(海岸線)「旧居留地・大丸前」から南東へ徒歩約8分



神戸市立博物館公式ホームページ▶

神戸市立博物館だより No.127 発行年月日:令和7年(2025)9月5日

展覧会スケジュール 2025.9 — 2026.3

2025年		9月	September	10月	October	11月	November	12月	December	2026年	1月	January	2月	February	3月	March		
特別展 23階	9/20(土)		【特別展】阪神・淡路大震災30年 大ゴッホ展 夜のカフェテラス										2/1(日)		2/28(土) 4/5(日)		【受贈記念特別展】ガラスとともに一玻璃文庫名品撰(仮称) 【特別展】秋岡図書—地理学者のコレクション—(仮称)	
			国宝 桜ヶ丘銅鐸・銅戈群 実物展示												聖フランシスコ・ザビエル 複製展示			
コレクション展示 2階	9/20(土)		11/24(月・祝)		11/26(水)		2/1(日)		2/28(土) 4/5(日)									
	村上家文書と長崎貿易 村上家文書は、江戸時代に長崎貿易に携わった商家に関する資料群です。なかには見帳と呼ばれる、スケッチ付の貿易品リストのような資料も含まれています。長崎貿易の様相を資料と美術品とともに探ります。		唐絵目利の絵画 長崎貿易において輸入絵画の鑑定をおこなった唐絵目利は、絵画の知識を有するだけではなく絵事にも巧みでした。対外貿易の最先端にあった彼らが描く作品を通じて、長崎における文化交流の足跡をたどります。		北斎と広重 フィンセント・ファン・ゴッホは、北斎や広重などの作品を通じて、理想郷としての「日本」に憧れを抱きました。《夜のカフェテラス》に影響を与えたとも言われる江戸の夜景など、館蔵の北斎・広重の浮世絵版画をご紹介します。		青銅器をもう一度 古代の日本列島には銅鐸をはじめとした、青銅で作られた祭器が数多くありました。いにしえの人々を魅了した青銅器の中から、当館が所蔵するコレクションをご紹介します。		ヨーロッパのガラス—かたちと装飾 江戸時代、長崎貿易を通じてもたらされていたヨーロッパのガラス器。海外との交流が限られていた当時、それらは日本のガラス職人にとって参考となる貴重な情報源でした。器のかたちや装飾方法に注目し、ヨーロッパと和ガラスの関係を探ります。		没後40年 神戸の田村孝之介 洋画家・田村孝之介は大阪に生まれましたが、後に神戸に移り住み、画業の多くをこの地で残しました。このたび、2026年に田村の没後40年を迎えるにあたり、彼が画家として神戸に暮らした日々をコレクションからご紹介します。		残るともしび— 「北風荘右衛門家文書」受贈記念展 江戸時代、兵庫津で問屋業を営んでいた北風荘右衛門家は、米穀や肥料などを取り扱い、北前船による交易を通じて莫大な富を築きました。この度の受贈を記念し、北風荘右衛門家がかつて誇った栄華の一端を明らかにする、文書群の魅力ををご紹介します。		びいどろ史料庫コレクション名品選 玻璃文庫受贈展に合わせて、当館で2011年に神戸松蔭女子学院大学名誉教授・棚橋淳二氏より寄贈を受けた「びいどろ史料庫コレクション」から、和ガラスの名品をご紹介します。江戸時代から明治時代の作例を中心に、和ガラスが持つ素朴な美にふれてください。			
神戸の歴史展示 1階	神戸の歴史展示 海や港を介して営まれた神戸の歴史と文化交流について、年代別に展示しています。		9/20(土)		11/24(月・祝)		11/26(水)		2/1(日)		2/28(土) 4/5(日)							
	突撃! いにしえのごはん いにしえの人々は、どのように食と関わっていたのでしょうか。食材確保から調理まで、その“ごはん事情”について弥生時代の考古資料を中心にご紹介します。		燗寸製造と神戸の近代 明治時代を通じて神戸の重要輸出産業の地位を占め続けた、燗寸製造。残された史料や写真から、当時の製造の現場に迫ります。		「マツチ製造会社ボスター」 明治40～昭和2年(1907～1927)		残るともしび— 「北風荘右衛門家文書」受贈記念展				「日記抄之写」 江戸時代後期～明治時代写							
【休館日】		9/1～19・22・29	10/6・14・20・27	11/4・10・17・25	12/1・8・15・22・29～31	1/1・5・13・19・26	2/2～27	3/2・9・16・23・30										

神戸歴史見聞録 肆拾巻 41

このコーナーでは、知られているようであまり知られていない神戸の歴史について、博物館ならではの視点でご紹介します。

NEWS&COLUMN

41

し り つ だ い い ち こ う じ ゃ が っ こ う ・ み な と が わ か ん ぎ ゃ う か ん

兵庫区 市立第一高等女学校・湊川勸業館

市内を歩いていると、思いがけない場所に歴史を示すものがあつたり、はたまた古くからの歴史を持つ施設・団体がかつては今とは全然違う場所にあつた、ということに気づいたりします。今回の見聞録の舞台は、古代から現代までの歴史が重層的に残る兵庫区です。そのなかでも、新開地の北端にあつた2つの場所を取り上げます。

現在、市立湊川中学校・市立楠高校がある場所には、市立第一高等女学校（以下、「高等女学校」と略記）がありました。明治45年（1912）に開校した同校は、本科（修業年限4年）・技芸科専修科（同3年）・補習科（同1年）の3科があり、本科であれば尋常小学校卒業後、国語や数学等の教科や家事、裁縫などを学びました。また、神戸市の教育にふさわしい実用的学科として、3学年以上には「商業」の履修を課していました。

道路を挟んで隣の兵庫区役所の位置には、湊川勸業館がありました。大正3年（1914）の開館から、市内で製造された工業製品の展示場や人々の集会場として活用されるとともに、「観艦式記念海港博覧会」（昭和5年〔1930〕）などの展覧会が開催されていたようです。

この2施設は、教育の場、産業振興やにぎわいの場として重要であつただけでなく、市の歴史にとっても大きな意味を持っています。市は大正7年に『神戸市史』という最初の市史の編さんを開始します。編さんに伴い収集された1000点を超える古文書や絵図などは、大正9年の「神戸市史資料展覧会」で一般公開されました。その会場がまさに、高等女学校と湊川勸業館だったのです。展覧会は勸業館の2階で行われる一方、階下では日用品の安売りも行われるなど、娯楽イベントとして実施されたことがうかがわれます。また、高等女学校では、京都帝国大学教授の原勝郎らによる歴史講演会が催され、当時の新聞は「兵庫津の歴史を平氏の昔から説き起こした」（『神戸新聞』大正9年5月24日）とその盛り上がりを伝えています。

受贈記念特別展

ガラスとともに―玻璃文庫名品撰（仮称）

2026年2月28日（土）～4月5日（日）

「玻璃文庫」とは、神戸松蔭女子学院大学名誉教授・棚橋淳二氏が2011年以降に蒐集されたガラス工芸品・七宝工芸品と、旧びいどろ史料庫から移管されたガラスに関する文献資料からなるコレクションです。

江戸時代に日本でつくられたガラス器をはじめ、明治時代以降、日本でも需要が増えていくメスシリンダー、メートルグラスといった理化学器具、原料の調合法を記したガラスの製造法に関する文献資料などその内容は多岐にわたります。

本展では、2025年度に新たに寄贈いただく予定のコレクションから、選りすぐりの約120点をお披露目します。

多様な輝きを放つガラスの魅力に触れる機会となれば幸いです。



20mlメートルグラス
白井松之助記号
大正時代頃



手彫り切り金赤に
エアーツイストグラス脚付杯
明治10～20年（1877～87）
金で発色させた鮮やかな赤色ガラスと
エアの筋を螺旋状に凝らした脚の装飾に注目です。



塵除け安産樹
江戸時代、18世紀～19世紀
西洋の文物を挿絵入りで紹介した大槻玄沢『蘭説弁惑』（1799年刊行）にも掲載。同書によれば、安産樹を水に浸せば
出産とともに開いたといいます。



※すべて玻璃文庫コレクションです。

特別展

秋岡図書―地理学者のコレクション―（仮称）

2026年2月28日（土）～4月5日（日）

地理学者・秋岡武次郎（1895-1975）は、古地図をはじめとする膨大な量の地理学関係資料を蒐集し、コレクションを形成しました。その中身を覗いてみましょう。



小佐井道豪「北極中心世界地図」
天保8年（1837） 秋岡武次郎コレクション

〔受贈記念特別展〕ガラスとともに―玻璃文庫名品撰（仮称）・〔特別展〕秋岡図書（仮称）／神戸歴史見聞録

大ゴッホ展

夜のカフェテラス

2025年9月20日（土）～2026年2月1日（日）



《自画像》1887年4-6月、油彩／厚紙、32.4×24cm

フィンセント・ファン・ゴッホ（1853-90）の作品コレクションとしては世界有数の質・量を誇るオランダのクレラー＝ミュラー美術館所蔵の、《夜のカフェテラス》をはじめとする約60点のファン・ゴッホの作品を展示します。2025年に開催する第1期では、オランダ時代からパリを経てアルルに至る画業前半を紹介します。

1870年代に画商の社員としてパリやロンドンに勤務するなど、早くから絵画芸術に親しんでいたファン・ゴッホ。1881年、ハーグ派の画家から、油彩画と水彩画の手ほどきを受け、《麦わら帽子のある静物》などの作品を描き、本格的に画家としての道を歩み初めます。その一方で《ハーグの景観（パッデムース地区）》をはじめ、街の景観などを主題に素描を繰り返しました。1884年からはオランダ南部のニューネンで、農民たちの実定な生活を題材とする

大作に挑みます。ファン・ゴッホのオランダ時代は、経済的な苦境や周囲との軋轢を耐え忍びつつ、画家としての技量を自ら培う日々が続きました。弟テオをたずねてパリにやってきたのは1886年の2月。ファン・ゴッホは、風景画や、静物画、そして自画像で配色や筆致の試行を続けました。印象派や新印象派など、パリの前衛的な表現から触発されつつ、他の画家には見られない独自の感覚も示すようになります。今回展示の《自画像》はその典型的な作品です。

1888年2月、ファン・ゴッホは南仏プロヴァンス地方のアルを訪れます。春の訪れとともに、この地の澄み切った大気と鮮やかな色彩に魅了されます。アルの自然を鮮烈な色彩対比で表現することに夢中で取り組み、その中で描きあげたのが《夜のカフェテラス》でした。

本展ではモネ、ルノワール、セザンヌなど、クレラー＝ミュラー美術館が所蔵する印象派をはじめとする同時代の絵画作品も展示し、近代美術史上でのファン・ゴッホの立ち位置を浮き彫りにします。また、2027年に予定している本展の第2期では、69年ぶりに来日する《アルの跳ね橋》をはじめとする、アル時代から死の直前までの創作に迫ります。震災から30年を迎えた神戸で開幕する本展で、様々な問題に直面しながらも決して屈することなく、絵画芸術の中に、陽気さと幸福感、希望と愛を求め続けたファン・ゴッホの人生に思いを馳せていただければと思います。

作品は全て クレラー＝ミュラー美術館
©Collection Kröller-Müller Museum, Otterlo, the Netherlands.
Photography by Rik Klein Goutink

●クレラー＝ミュラー美術館



ファン・ゴッホの人生に深い感銘を受けたヘレーネ・クレラー＝ミュラー（1869-1939）は、世界有数のファン・ゴッホ作品コレクションを築き、1938年にクレラー＝ミュラー美術館を開館しました。彼女による作品の収集と公開活動は、世界的巨匠としてのファン・ゴッホの名声を不動のものとししました。本展の作品はすべて、この美術館からやってきます。

ファン・ゴッホのオランダ時代をたどる

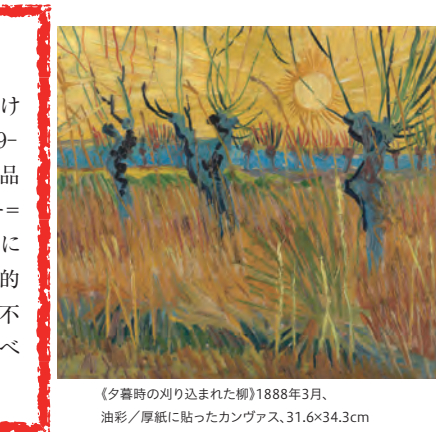
フィンセント・ファン・ゴッホは、1853年にオランダ南部で生まれ、28歳からハーグで画家として本格的に活動を始めます。1885年までのオランダ時代のファン・ゴッホの足跡を、現地ですとりました。（現地風景写真と文章：塚原 晃）



《麦わら帽子のある静物》1881年11月後半-12月半ば、油彩／カンヴァスに貼った紙、36.5×53.6cm



《モンマルトルの丘》1886年4-5月、油彩／カンヴァス、38.1×61.1cm



《夕暮時の刈り込まれた柳》1888年3月、油彩／厚紙に貼ったカンヴァス、31.6×34.3cm

●ハーグ



オランダの政治中枢ビネンホフにほど近い、プラーツの街並。ここにあつたグーベル商会ハーグ支店に、ファン・ゴッホは1869年より勤めました。



画家として1881年に再びハーグに移ったファン・ゴッホは、多くの都市風景を描いています。ハーグの中心にある新教会付近を描く作品と、ほとんど変わらない風景を今も見ることができます。

●ニューネン



ファン・ゴッホの初期の代表作《じゃがいもを食べる人々》はデ・フroot家という農家での生活を題材に描かれました。その跡地の近くには、ファン・ゴッホも目にしたはずのデ・ロースドンク風車がそびえ立っています（左写真）。



ニューネン周辺の田園を歩いていると、いたるところに左の写真のような柳の並木に出くわします。

パリ時代、またはアル時代のファン・ゴッホの作品にしばしば風車や柳、そして跳ね橋が描かれるのは、もちろん現地でその風景を目にしたからにはかなりませんが、画家の脳裏にはオランダ時代を偲ぶ思いがあつたのかもしれない。

●ズンデルト



ベルギー国境にほど近い、北ブラバント州の町・ズンデルト。その中心に、1853年にファン・ゴッホが生まれた家がありました。その跡地は、彼の幼少期や家庭環境を紹介する博物館となっています。彼の絵心の始まりについては諸説ありますが、この家に家庭教師として勤めていた女性の手ほどきで、風景画を描き始めたとも言われています。



1883年冬からファン・ゴッホは、ニューネンの両親が住む牧師館に転居します。その家は現存し、裏手の洗濯部屋を改造したアトリエも遺っています（上写真の右側の小屋）。

〔特別展〕阪神・淡路大震災30年 大ゴッホ展 夜のカフェテラス